

古生物学とともに

速 水 格 (地質学専攻)



「少年老いやすく……」とはよく言ったもので、いつの間にか時が経ち停年を迎えました。私は20代を東大の学生・院生、30代を九州大学理学部、40代を総合研究資料館、50代をこの理学部で過ごしました。ほぼ10年ごとの転勤によって適度にリフレッシュしながら好きな研究を続けることができ、本当に幸せであったと思います。この間に教えを受けた内外の優れた恩師と学友、そして研究を支えていただいた素晴らしい方々に紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

教授会には8割方は出たと思いますが、行政的な仕事は大変苦手なので、なるべく各種の委員など仰せつかることがないように、目立たないようにしておりました。理学部・理学研究科の発展にはほとんど貢献することができず、誠に申し訳ないことですが、教授としては研究・教育に専念する時間が比較的あった方だと思います。それにも拘わらず、「学が成った」わけでも何でもなく、研究面では着想と挫折を繰り返すような毎日でした。

古生物学は時間軸をもつ生物学で、歴史科学の性格を有するとともに、地球科学と生物科学の接点というユニークな位置にあります。しかし、しばしば素材の不完全性という壁にぶつかって苦悩

します。生物学的な古生物学では化石の記載作業を別とすれば、特にルーティン化した独自の方法といったものはないようです。ある課題に対してユニークソリューションが得られることも少ないと思います。いわば未知数の多すぎる連立方程式を解こうとしているようなところがあります。それでも、この20年ほどの間に、実に様々な自然科学の理論や技術が導入され、創意工夫と意識改革が行われました。その結果、古生物学の範囲は驚くほど拡大し、化石に対する理解や現生生物に対する歴史的な見方も大きく深まりました。この過渡期を試行錯誤しながら歩いてきた研究者の一人として誠に感無量のものがあります。

古生物学には「化石に生命を吹き込んで考える」という一種独特のロマンと知的興奮があり、これが私たちの研究の大きな原動力になっていると思います。恐竜ブームもあってか、このところ進化古生物学の研究を志向する若い人々が増え、私どものゼミも院生が15人と大入り満員です。すでに国際的に高く評価される学位論文を書いて各地の大学などで大活躍している中堅研究者も少なくありません。自分の学はなかなか成りませんが、多くの意欲的な院生・若手研究者と交わり、逆に彼らから有益な刺激を受けながら過ごすことができたことにはこの上ない幸せを感じます。

しかし、この10年、決してよいことばかりではありませんでした。呪うべき定員削減は私どもの研究教育にも甚大な被害をもたらしました。学生数や機器類の増加で教室は超過密状態になりました。掘立て小屋でもよいから、少し広いスペースが欲しい気分です。校費の目減りにより購入する雑誌や図書も少しずつカットさせるをえません。また、これらの影響で精神面でも良い意味での研

究者の大らかさや余裕が次第に失われてくるように思われてなりません。

古生物学は歴史が古いわりにはささやかな学問分野であります。理学部では教授会メンバーは3人だけで、他部局にもこの専門の教官はほとんどいません。理学には他にもこのようなマイナーではあるが独自性をもつ基礎科学分野が多いことと思います。全国的に大学では野外研究を基礎とする自然史科学諸分野での困窮と研究教育環境の整備の遅れが目立ちます。自然離れは子供だけでなく、大学の研究にまで及んできているようです。目先の経済発展に直結する科学や巨大科学が発展する一方、これに参画できない科学は情けないほど小さなパイを切り分けることになります。しかし、現在どれほど大きく発展している科学でも、もとをただせば、バラエティに富むささやかな研究から始まっているに違いありません。私は10年前に理学部に来た時、このような問題を広報に書かせていただきましたが、状況はむしろ悪化しているように感じます。

近年の進化理論の1つに Red Queen Hypothesis と称するものがあります。地質時代の生物

の属の生存期間を統計的に調べると、各分類群の中ではすべての属がほぼ等しい確率で絶滅していることがわかります。このことから、「鏡の国のアリス」の赤の女王が言うように、変化する環境に抗して生物が存続するには絶えず走り（進化し）続けていなければならないと演繹するものです。それぞれの零細な研究分野も厳しい時代に生き残るにはそれなりの努力をしなければなりません。しかし、学問の発展の前提として変異性が必要であると考えるのであれば、研究者全体の広い視野と相互理解、そして軽率に学問の格づけをしない姿勢が切に望まれるように思います。

物質的には必ずしも満たされない10年でしたが、自由な研究を進められた精神的環境および若手研究者との間で全幅の信頼関係を築くことができた点については心から満足し感謝しています。退官後は、いま少しオリジナルな研究を続けるとともに、古生物学より一回り大きい自然史科学全体の新たな振興のために何か貢献できればと考えております。有難うございました。理学研究科の発展を切に祈ります。

